

研究資料

廻国道の記〔公刊〕三

鈴木 廣 之

永き日かりもやや暮れて、春雨そぼつ折なれば、いとどこくらし松蔭に瓦葺の御堂あり。石薬師なりと聞からに参りて拝み奉り、南無薬師瑠璃光如来、この長旅の程々無病平安にまもらせ給へ。諸仏の誓願多き中に薬師如来と申は万病集蔵の病を癒し、息災延命長久に守らんとの御願、上瑠璃世界の主にて、瑠璃の坪に諸薬を入、衆生の病難しりぞけたまふ。三皇の神農は百草の至味をなめて能毒を分ち、諸病の薬となし、万病を治せしめたまふ。天子岐伯を始めとしていためうだうに至り、血脈、氣息、五臓六腑、皮肉骨の間に病の至る所を針灸治療の方を伝へ、医業の徳をあらはす。其よりもたのもしきは御名も堅き石薬師にてましませば、ふかくたのみをかけ奉る。

無病にとたのみすゑける石薬師かたきぎぐわんを忘れ給ふなかりねの枕そばだてて、其夜はそこにとまりけり。明ればいそぎ宿を出、たどりとて行程に、実やその名も旅の道、杖つきにこそ著にけれ。

老らくのためにはよしや杖つきのつきぬ旅路をたどるこの日に猶行すえに人家ありて賑はひたる里なりけり。いづくぞと問ければ、四日市場とさきゆなる、人こそり売物あつめ、牛馬の往来も重かりけり。

いつの世にいつをよき日の日どりにて四日市場と爰をいふらん

『そこを過れば雨ふり出、風もしきりに吹きおほひ、いとど忙しき増りけり。しかもゆうべに成ぬれば、馬もつかれて道遅し。蓑笠ふかく着なしつつ、まだ見ぬ方の事なれば、人に問つつ行程に、桑名とやらんに着にけり。夕汐満来て海ちかきあまの小家に宿をかる。かきあつめたる藻屑火のくゆる斗りの柴の戸に網曳の魚籠並べ置、所狭しき萱筵、今夜しきてもめづらしきは新らしき肴あり。少しづつ買いあつ

めて調理し食はんとぞおもふ。

さかななどもかふてくはなにかる宿はしかもりやうしをあるじなりけり

其夜の雨のしきりに降り、茅屋の軒もる零をよけ、かたよる枕となす物は水の埋れ木拾ひ来て、あまの焼さし匂はなし。雲くらかりし天の戸もおし明がたより雨晴て、夜はほのぼのと明にけり。いそぎ船にのれやとて、舵取しいてまねく程に、とる物もとあへずみな船にうち乗りて、磯辺もいまだ去りやらぬに、追手の風に帆をあぐる。挙る間もなきうちに早五六町も過ぬらんと思ふに、俄に浪風あらくなりて、親船も来さりけり。うきぬしづみぬ行船の奥津塩合はやければ、船に散入る白浪にいとどしはれし旅衣、しぼる斗りになりけり。みな船底にひれふして東西前後もしらざりき。帆をおろしなばあやまちせん、ただそのままにおけやとて、風にまかせて馳せてゆく、水主舵取一同にこれはこれと斗りなり。運命天にある物と神仏にまかせよとて、眼をふさぎてゐたりけり。桑名より宮までは海上七里があいだなるを片時がほどにはせ付けり。みな船よりもあがりつつ、さてもあやうき命なり、神のまもりのなかりせば、いかで爰へは来るべき、はや心のうちに念じつる熱田の宮にまうでつつありがたさを申奉る。

船よりもあつたの宮をおがまずばあらき浪風いかでしのがん

やうやう風もしづまり、憂き難儀をのがれたるうれしさをもち語り、馬追ひに歌うたわせてやうやうゆけば、さきちかく鳴海にこそは着にけれ。里人の数多出て広き田づらをうち返す、汗をながしてうつ傍に、鍛うち捨て里人が昼寝したるもおほかりけり。所はおなじ里人なれど心はかはる習とて、胸せはしきといふなると、おのれおのれのしやうしやう馴馴なりと見やりて、

我も人も有にまかせて有ぬべしなとなるみのすゑをしらねば

三河の池鯉鮒に着ぬれば、はや夕ぐれになるまに、いづこに宿をかり衣、うらぶれ来る事なれば、薪折くべ其影に友とする人うちよりて、けふ船中にて憂き思ひおもひ出して物語、はや死ぬべくもおもひし時、常にはねがはぬ後生をも俄に念ずる心のうち南無阿弥陀仏妙法華と口の中にて申つる慚愧懺悔の物語してうちわらふこそおかしけれ。夜も明ゆけば宿を出、爰よかしこと行程に唐衣にはあらねどもはるばるきぬる旅の袖、きつつ馴にし妻しなけれど蜘蛛手に物をおもへとや、八橋

にこそ着にけれ。道より少し傍なれど名にしおひたる名所なれば、行て見ばやとたどりてむかしの跡をながむれば、川はいつより埋れ水、朽てもあらぬ橋柱さかひも分ぬかきつばた根さへかれつつあはれなれば、

八橋の下ゆく水もかれはてて花にも事をかきつばたかな

そこをも過て行程に矢矧の宿を通りけり。宿の垣根もあればて名のみ斗りぞ残りける。むかし此所に矢矧の長とて長者あり、上瑠璃といひし姫をもつ。ゆうに優しき姿にて春には花と身をかざり、秋には月に心をよせ、玉のうてなにすまひしを源の牛若義経と申せし其頃平家におそはれたまひ、商人に身をまかせ奥州にまよひ行、旅行道にはまよはずして此上瑠璃に迷ひつつ恋のやまひに身をくるしめ、あらぬなげきをし給ひし。人毎しりたる事なればいふにおよばぬ物語。ただ何事もむかしなりけりとて、

よしつねに有物ならば上るりのつばねにいまもしのびいくなん

矢矧といへばはやく過、岡崎にこそ着にけれ。人家軒をならべ、商人多くあつまれり。そこを過んと行処にむかいより人あまた弓、胡篋をもたせつつ乗物乗かへ引よせて来る。誰なるらんと問ひければ、天下様より此道中太平堅固の御仕置被_レ為_二仰付_一之制札在々所々に至りうたせてのぼらせ給ふ其かた様にてまします、世の常の人ならねば恐ありとて馬よりおり、簞しがぐれに立かくれ笠ふかく引そばめよきて通し奉る。

行違ふ人にこころをおかざきの馬よりおりて身をかくれ笠

藤川といふ川渡り赤坂を通るとて、友たちの中にひとりころびて袖に赤坂つけながら、あらひもあへず坂をのぼるに、

赤色に袖をなしつつ赤さかをのぼるやごいのくらいなるらん

則そこを御油といふほどに幸なりける所なり。やうやう日も暮なん、爰をとりて吉田なりといひつつ宿をかる。家数多あれど一樹一河の縁や有らん。さる家に入りて足あらひ、疲を休めけり。あるじ出あひ、いとねんごろにいたわり、霄更るまであそびをる家もさすが心有て住なしけるこそやさしけれ。庭の桂木高低に石などたたみながら小柴垣ゆひたておかしき様なり。軒端をつたふささがに呉竹の落葉の塵もおかずなんしていさぎよく住めり。やさしくおもひて、

来てみれば心よげなる住所よしや吉田の名にもたがはず

明ぬればはや出んとする。いづくもかりの宿ながら、おかしく夜を明したる所なれば、名残有やうにて、あるじも又こまやかに出たせける程にながらへて、又のぼりなば訪はん、訪へやといひかはして出ぬ。大岩とやらんいふ所を過るにも関の岩門ふみならし二川にこそ着にけれ。面白や川の名おおしといへども聞伝へし三瀬川は冥土黄泉のちまたにありとかや。これは又眼前のけうがい一は足らず二川なり、渡り川の稽古にもわたりてみんといふに、名のみ有て川はなしといふ程に、見ねばただ名のみとおもふ三瀬川このふた川も川のなければ

ふみぬ方も又白須賀といふ所に着ぬ。猶も行ゑにおもしろき所あり。東南には折海上漫々として滄波数万里に流れ、西北には山ありて雲皓皓たり、碧羅の天光りかがやかし、春色四方に現れたり。砌の松風ゆるく吹て、野辺の千種も露をふくめてゆくもあり。磯辺には網引よする船もあり。渚には又かしらあかく色くろき女とも見へぬものの塩汲桶の肩かへてはこび来て、浜路の真砂にうちかくるつかでもをらぬ物なれば、山人にあらぬ男の塩木のために薪こりて磯山がぐれに伝ひ来る。をしも春の土産に花折そへ重荷に付て帰りぬ。花はしほれがちなれど心はやさしと見ゆる。かかる憂きわざながら住めば都とおもひけむ、我家のあたりにおろし置、海士衣汗にしほれし折に、荆棘垣根にはし置柴の戸ぼそに竹をはしら松折かけたる陰をさへ玉のうてなとたのみしみて寝ぶりあたる。翁はかの邯鄲の枕に廬生が見し夢一睡のうちに五十路の春秋を送りむかへし柴花より猶まさりてやおもうらん。これかれおもしろく睡めりて爰は何といふ所ぞと人にとへば、塩見坂と云所なりときくに付て、

真柴もはこぶ 朝夕に汲は汐干の塩見坂山をもかくる海士のすまひは

異方よりはおもしろくて。過うき心ちするに馬追来るものの言ける、今少しいそぎ給へ浜名の橋見せんとなり。いざさらばとて行に、これなん浜名の橋なりけりといふを見れば、誠にむかしの名のみ斗りにて有けり。あはれげに世の中は時うつり事変じ花散葉落盛へ衰ふ習驚くべきにはあらず、旧りにし跡こそなつかしけれ。

跡をだに見えねば人にとををみはまなの橋の名のみ斗りを

はるばると来ぬれば汚る旅の袖を新居とかやに行来たる。これなん今きれといふ所なり。添川のやうなるを船にて渡りゆくに、潮と川水と落水底には海松布もあり水草もあり。これかれ流れあへぬを船の中へひろいあぐる。海松布斗りをもてはやして水草をばえり捨る。難波入江にあらばこそ、よしともあしともおもふけれ。

おなじ海におなじ川、名こそかはるともえらび捨んもいかなりとて、

おなじ海のみるめ斗りをなどひろふ捨るもくずもあり果ぬ世に

船程なく向の岸にさしよせうとき道をも辿りゆひて舞坂といふ所に着ぬれば夕陽西にかたぶき、行ききくらかるべしとてそこに寝なんといふを、友たる人、今少しゆひて浜松といふ所あり、これなんおもしろき所なり、いて泊まらん、いささせ給へとしいられて、又夕べふかくたどり着てそこに寝にけり。春風さへつよく吹て笹葺の軒のなよ竹ふしなびき、窓にかけたる菅薦もふきかへされて内外も分ず、春寒し爪木折くべ、足鼎にすへたるちいさき鍋に湯わかし、粟飯したためて焼火のかげにてぞ味はひける。素茶淡飯もあけば則きうすとかや宿の姥をうちもよせて酒のみ、けふの寒さをわすれ酔ふし旅のおもひでせんとて、盃数めぐらし、おかしき歌うたひ心をなぐさめける。しかも所の名によせて、

浜松の音ざんざんにくるわされこうたをうたひ酒もりをする

其夜は鳥さへみだれて声をそへたれば、まどろむ程もなかりし。明ればそこをも出来り、むかひを見れば大きな川あり。これこそ天龍の渡りなりと舟さしよする異人もおおければ我先とのりうつる。人馬一同に乗る程に船端残りすくなく、浪ちり入あやうかりし。ふたつの川やうやう渡りこへて人人いさみけり。猶行ゆけば左手にあたり一むらの里みえる、あれなんいにしへ平の宗盛公御寵愛したまひし湯谷といひし女房の住にし池田の宿なりといふに付て、

いにしへの湯谷のありかのこひしくば尋いけだの宿もちかきに

おかしくうちわらひて行程に空も霞の晴晴て、名にしおたる富士の山。鏡をかけたるやうにきらきらと見え渡る。雪は朝日にうつろひて薄紅にかがやきけり。三国無双の名山なれば、大唐四百余州にもいまだ見ざりし山なりと唐人もいひ由なれば、中中にいふも愚なり。あたりに似たる山もあらば、あれかこれかと問ふべけれ。雲か山かのけしきをば、さながら姿にあらわせり。在原の業平は時しらぬ山と

詠め給ふ、常にも消ぬ雪の下草いつの春をもしらで、過鳥も翼をやすめすばよも一羽にはかけり難し。□の覚たる有様肝に銘じて殊勝なり。権現嶺に立たまへば、麓に浅間大菩薩、薨をならべておはします。尊かりけるよそおひは心言葉も及ばれず。今日までの道すがら名所ども旧跡どもおもひわすれて富士の山殊に見附のこうなれば、目かれせずながめて、

けふよりはまだ見ぬ人にわれも又富士を見附のこうしやぶりして

言語も絶ておもしろければ、いそがんだをもちわすれ、過こしかたをながむれば、遙に三保の松原あり。前には海水じょうじょうとして悪業煩惱の浪もそれ、我行方は武蔵野や空より広き所あり、其ままたる言葉あらば、まだ見ぬ人にいひやせんとおもひつづけて休らひしを、友たる人のいふやうは、いまだ五日路経たりとも此富士の山はかくれぬぞ、まづこなたへといざなはれ、袋井噺を通りけり。むかいより人来る、うしろに負へる米俵殊ふたつ見へけるほどに、

大黒のふくろいなはて持て来るはもつとも米のたはらなりけり

爰をもやうやう過ゆけば掛川にこそ着にけり。小家がちなる一村なれど、のぼりくだりの商人の一夜のとまりも有なれば、ちいさき家のうちよりいともやさしき三味線のご多春風にさそはれて撥音しづかにきこへ来る。誰がしらべとはしらねども、いとおもしろくて、

しやみせんによきかけがはの宿なればいとおもしろき音こそきこゆれ

過がたけれど馬うち追ふて行程に、爰こそ日坂なれ。殊には雨ふり風ふけば、いざあゆまんと馬よりおる。藏餅の名所なればいざ立よりてくはんと云。さある小家のうちよりも年破瓜の頃なる女房のいまだ齒をも黒めず手足もきよなるが、麻衣あさき色なる袷ぎて、こなたへ御腰かけられよといふ。一樹の陰の雨やどりも他生の縁なれば、其家に休らひ餅をねらせてまもりゐたる。

立よりてくふにつさかのわらび餅ねるに付るもこころよき哉

其新坂をたどりのぼるに雨風なをもしきるにぞ、簗笠ふかくきつれつつ杖にすがりてよろほひたり。爰はいにしへ西行法師、又こゆべきとおもひきや命なりけりと詠ぜし小夜の中山といふといへども、雨さへふりて風ふけば、ちかきあたりも見えわかず。しかも暮そう空なれば立おおいたる夕の雲越行山の甲斐ぞなき。たどり来

ぬるをくやくして、

雨に風ゆふべの雲も立おおひあやなく越るさよの中山

坂の半に少しひきくする所あり。家あればこそ焼火の影は見ゆれとて尋入、うちを見れば、夫婦世を渡るいとなみしてゐける。草臥やすむる程、かりのやどりして、湯のわきあはせたらば賜べといひけるに、女房たちてふるき器に湯をいれもて来る。此女房色黒く眉目わろく、形は木の折のやうなるが、殊に蒜と云草をくいたるやらん、その香の臭き事例へんかたなし。かの雨夜の物語に、鬼に向ひたらんやうにおもはれてといひしも思ひ出られてうるさし。いそぎいでて又一坂を越て金谷といふ所に辛うじて着ぬ。夜に入ぬれば、宿をましかね侍れども、とかくいひつ宿を借り、雨にぬれたる袖も裳裾もしぼり、焼火にはしなんとて寝もいられずゐけるに、雨いよいよつよくふり雷もなりさはぎ物凄く、くらき夜なれば、鬼一口にくはるゝかと人々寝もいらすなりけり。

雨もふるかみなりさはぎくらき夜はかなしきかなや鬼の一口

露まどろまず物凄く、かすかなる燈火かがけて明る夜をまちけるに、明ても晴間なくふりつづきて、つれづれと送る日のいとど永日の暮待侘て、其夜もおなじ宿に寝ぬめり。あすも又降もやせんとおもう所に、夜中うち過るより雨晴て空さりげなく夜あけぬ。異人もあまたこの雨にをさへられて、旅人みなよろこびてうちいでぬ。大井川わたらんとするに、きのふ一昨日の両日の間ふりし雨に、川水殊の外まさりて、金谷、島田のあはひ一里斗りの程なるに、一面に流れあひていづく淵瀬とも見へわかず。川風あらましく浪ふきたてて中々渡るべきとおぼへず、あまたの旅人馬ともに川辺に出、あきれ果たる有様なり。友たちの中に進みていひけるは、人寿夭の道にまかする習ぞ、なじかは此川渡りこへずして又本のやどりに帰り、けふもむなしく暮なばあすの空も猶おぼつかなし。此川の案内こそよく存知てこそ候へ、それがしが馬よりまづ入ひて見申べけれどとまつきさきうちいるる。おくれじと雑駄二十四疋一面にならべて人馬百二、三十、常々渡す所より十四、五町川上へをしのぼせて流れ渡りて、渡す馬は鞍坪をやめ、人は肩輿ではやき流れの淵瀬もしらぬ所を喚ひて渡す。足もたまらず踏みどもおぼへず、矢をいるよりもはやければ、あはやあはやといふ程こそ荒さかまく水にをし落されて、五六町斗り川の下へ辛き

息をつきてぞうちあげたる。されども水におぼれ死する者はなかりし。それよりこそ跡に残りつ数十の旅人うちいれうちいれ渡りけれ。おもひ設けたる事なれども、あやうかりける渡りなりけり。

聞しよりまさりて水の大井川名に流れたる渡りなれども。

袖漬ちてむすびし水にはあらねども、春立けふの風にふかせて旅衣うるおふるま馬もしづかに追ひ行所に、むかふの方におびただしき煙立のぼる、あれはとあやしみ見ければ嶋田の宿の火あやまちとて、野にありし者は鋤鋤をすてはしり行、山なりし者は樵木をすてまどひ行。共に行ひて見れば、小家より火出で大きな寺に炎付ぬ。きけば阿弥陀堂なり。弥陀の悲願といひながら、あまりにきつき事なりけり。されども仏をば取出し奉り、とある小家に移し奉り、法師は寺に帰り、仏前にかざり置たる道具、火ともし、花入、香炉などいふさまたまの惜物取出さんとせしかども、炎風にもみあひて余烟寺中に満ぬれば、むせび倒れて前後を忘れて、あたりへも寄附れず、あきれ果たる躰なり。年月弥陀の名号をとへたる時の叩鉦片時がほどの湯となり、朝暮供奉し奉りし花皿、不断香の煙いと心ぼそかりしも、切檜より燃えあがりて炎々たれば、玉楼、御厨子、高欄の花のうてかたみな焼けちり、天蓋の蔵手に両の玉、高麗の錦の幡、唐縫の打敷みな灰となりて、その花絶てなければ衆生教化の詞にたがはで、誠になげかしき有様、見るもあはれなり。それより小家共に火付て一町ばかり焼けにけり。

いかでかは水の島田のやけぬらんひが事なれば里の名をし

あはれと見なし行程に霞のうちに一むらの里あり。藤枝の宿なりときくからに、時にあひたる所なりとて友たちの中に、

春霞たちなへだてそ藤えだの花もみまほし宿もみまほし

それより瀬戸といふ所を通る。家毎に黄に染めたる飯をちいさき花びらのやうにし出し置く飯を見て、

家毎のみせのかざりにきをつけてその飯ならばかうてまいれよ

やうやう日暮ぬれば岡部といふ所に宿からんといひて小家のうちに入ければ、やどの女房面付にくげにあいもなくあしらひけれど笹の一夜のやどりなれば、とかくいひて宿を借り。しかしながら頑なれば、まして口もさがなし。

かるやどの女のくちのさがなさに心をかへの旅寝ものうき

また夜をこめて立出、宇津の谷を行。珠・数玉のおおひさなる団子糸にもつらぬき
すくうても売る。これこそ宇津の谷の十団子なり、めせといふに付て、

めせめせといふうつのやの十だんご十に一のいれさへもなし

宇津の谷をこゆるにぞおもひ出けり、いにしへ業平とやらんこの山をこへ給ふ
に、聖にあひたまひて見れば見し人なれば、みやこへ言伝などしたまひて、夢にも
人にはあはぬなりけりとくちさみたまひしとかや、現にたどる鳶の細道も今程はら
ひのけて清らに作りなしたれど、さすが所の名草なれば且根ざし残りて萌え出
る。紅葉も少少のこりて待るもやさし。

うつ山うつつにたどるつたなさを誰に行あひ夢がたりせん

かかる山をこへて鞍子川を渡る。乗りたる馬の蹴上げたる浪、馬おふものにかか
りたれば、うるさしとて事の外詫けり。鞍子川の蹴上なればかゝりたるこそ理な
れとて、

くつくつといへば曲なきまりこ川けあげをかりて渡す馬追

そのすゑにも又安部川といふあり。これなん紙子仕立ててあきなふ所なりけれ
ば、召して通らせたまへといふに付て、

あべ川の水もくははるしぶかみこもみでをしつつめせといふなり

駿洲の府中より江尻を通るとて道行人何やらん重き物をうしろに負ひ、我ごとく
牛にも負ぶせてうしも草臥われも草臥、えしりえしりと来る程に、

おのれさへおもきおもにのうしおふて来るあしもとはえしりえしりと

おきつ浪も終には磯ちかき□にそひ来て清見寺に着ぬ。これなん聞き及びし御寺
にて侍りけり。行ひて見物せんとたたみあげたる石の段段のぼり入てまづ仏前を拝
み奉るに、御厨子の戸ぼそさしかためて尊像はおがまれ給はず。方丈には絵かいた
る障子、薔、遣戸たてて、清め置たる縁のかたはらに並居て四方の気色を見送れ
ば、庭の真砂の塵払、苔むす方には古木の梅あり。其梅高さ三四尺斗りにて両方へ
枝さしのびたる事十四、五間もあるらん、おのづから垣根つづき下枝の重ければ、梅
と人のいひならはす。暮行春の事なれば、青葉がくれに散残る花それかと斗り二
ツ三ツ見えけるを、初花よりもめづらかにおもひて目もはなさず見おるに、折ふし

風吹来りて散さへ余所に成ゆくほどに、

散花に風をもたせてやり梅のつきぬくやうな香こそさきたて

うしろは山、まへは海、峯よりすさぶ春風に霞うながす海づらに肌しら浪のたち
がさね、汀にたてる笠松にむれる鷺の見えかくれ、深山鳥も声そへて、くるや塩
路の海士の里浦山かけて詠れば時の移るもわすれはてて、

しはしはの時をうつして清見瀉人のとどむる関ならなくに

日も暮なんといふ声におどろかされて、はるかなる道を行過、蒲原とやらんに着
ぬ。爰にとまれとて荒らなる小家に宿をしめて夜を明し、明もはてぬに起出て富士
川をわたる。閏三月上旬なれば春雨しげくふりぬるに、富士の雪かつ消やらん、水
かさまざりて川浪あらく、浮きつ沈みつやうやうにて、いと心ぼそし。されどもと
かく向かひの岸にさがり、馬に荷をぶせてうちいそぐほどに、原、吉原、三枚橋、
沼津といふ所にてしばし休み、それより三島といふ所につきぬ。日はいまだ暮残り
ければ、名もかくれなき明神に社参いたすべき心かげ有て、身清め手あらいて神前
に向ひ奉る。此御神は本地大通智照仏にたまします由なれば、現世安穩、後生前生
とふしおがみ奉り、御地の〳〳〳〳風情いさみにねむるを、しかも水底の鱗まで
ゆふゆうたる浪間にうかび、松吹風も心ありげにて、そり橋の末はるかなるかたよ
り鳥帽子きたる神つこあまた出て、御内陣の燈明かかげていとこの鼓の音さつさつ
の鈴の声しておく物深く上古たるよそほひいと尊く見え奉る。しばし拝みめぐりて
下向申ければ、其日も暮ぬ。さらばとまり侍らんとてそのあたり見ありきて、夕月
夜のおかしき程に、しらぬ小川あなたこなたへわたりなどして（以下不明）

《註》

それぞれの註について、『廻国道の記』一（三二七号）、同二（三二九号）、同三（三三三
号）の別と、該当頁および上・下段の別を「」内にいれて註番号の下に付した。

1 「二・36下」旁註「声かし福田氏音かし」（墨書）。「福田氏」は福田本のことを指すもの
と思われる。

2 「二・36下」「あそうつ」は、現在の福井市と鯖江市の間にある浅水（麻生津）かもしれ
ない。

3 「二・34上」旁註「中かし神と云フコトキコエズ」（墨書）

4 「二・35下」二条は関白前大臣明実公」については、又兵衛の生年、天正六年以降
「明実公」なる人物は『公卿補任』を参照するかぎりでは見当たらない。この「あきさね」

は二条昭実のことと考えてよいだろう。

5 「一・35下」 頭註「かしんヲけじんト福本ニアリ雲の上人ヨリ下塵ナシルベ」(墨書)。「福本」は「福田本」を省略したものだろう。

6 「一・35下」 「れ」に旁註「原本ナシ」(墨書)がある。国華本には「れ」があるので、この註のいう「原本」が国華本の底本と別のテキストを指すことは明白だろう。

7 「一・36上」 旁註「原本ニ化してトアリ作の誤かし」(墨書)。国華本は「吟して」となっている。

8 「一・36下」 頭註「『おもてしろきおんなの人をとゝむるはさなから関の地蔵なりけり』トアリてコレヲケサズニ右ノワキカキナホシアリ其歌ハ」(墨書)。この注記以降は、「カキナホシ」の歌を頭註に置かず、底本の表記にならって和歌の右側にやや小さな文字で書き添えている。

9 「二・27上」 頭註「耆婆ハ印度ノ医者ナリ。天子或ハ天師かし。岐伯。医術列伝、按帝王世紀岐伯嘗味草木典主医藥経方本草素問之書咸出焉。くハた華陀。医心方ニハ華他トアリテクエトト仮名アリ。華他針灸経トアレハ氏モ針灸ヲヨクセシ医ナルヘシ。めうたう明堂経ハ鍼灸ノコトヲ出シタル書。明堂点ハ鍼灸ヲナスヘキ点ナリ。医心方卷二、夫黄帝明堂経章扁鍼灸法トアリ。又同書ニ明堂者黄帝之正経聖人之遺教所注孔穴靡不指のトアリ。又同書明堂甲乙是聖人之秘宝トアリ。就テテ考フルニ針灸ノ事ヲ後ニハ明堂ト云ヒシニヤ。医術列伝一雷公ノ条ニ按素問黄帝坐明堂召雷公而問之曰云々」(墨書)

10 「二・28下」 旁註「原本漢トアリ」(墨書)。国華本の表記は「奥」。

11 「二・28下」 旁註「福田本ヤとあり」(墨書)。国華本の表記は「ヤ」。

12 「二・28下」 旁註「福本満トアリ」(墨書)。国華本の表記は「汐」。

13 「二・28下」 旁註「福本知ら」(墨書)。この箇所の国華本の表記は「跡をこそ見えねは」となっている。

14 「二・29上」 旁註「福本め」(墨書)。国華本は「き」。

15 「二・30上」 旁註「常イ」(朱墨)。国華本は「に」。原本と推定される『越前人物志』の挿図写真版(二二七号挿図一参照)に該当部分が写っており、この箇所は「常々」と書かれている。

16 「二・30下」 「る」と「し」の間に「しか」の二文字が欠けていることを示す旁註「しか(国華ニヨル)」「(赤鉛筆?)」がある。また、同じ箇所にも旁註「しかイ」(朱墨)がある。

《補記》

東京大学史料編纂所本『廻国道の記』の公刊を終えるにあたって、本文の錯簡等の内容について若干を記しておきたい。

この『廻国道の記』が当初の完全な形をとどめていないことは、冒頭に「書始メ途中ノ様ナリ」とあることや、「(以下不明)」で終了していることから容易に推測できる。さらに、本文中に「是ヨリ紙一枚半磨滅シテ更ニ判読スル能ハズ」「一・

36上」と「是ヨリ関迄ノ紀行ハ無之」「二・36上」のふたつの注記をみることでできるのだが、この四つの注記の内容はいずれも、判読できなかったり、初めから欠けていたりしている部分が本文中にあることを具体的に指示したものである。この注記から、冒頭と中央、末尾の都合四つの大きな欠損部分のあることがわかり、これに挟まれた三つの部分から現状の本文が構成されていることになる。

そこで、この三つの部分を初めから(1)、(2)、(3)とし、そこに登場する地名を手掛りにして内容を検討してみよう。

(1)は、数行の文からなる。ここに登場する「九十九の橋」は、現在も福井市に存在する橋で「東遊記云、福井の町の真中の大川にかけ渡せるをつくも橋と云ふ、其大さ京の三条の橋程ありて、半まで石橋」(『増補大日本地名辞書』巻五)という。

(2)この部分の地名を、初めから順に敦賀「二・34上」までひろっていくと、「木の目山」、「二ツ屋」、「湯尾峠」「一・36下」、「榛原」「二・34上」がみつかる。これらの地名は、いずれも武生から敦賀にいたる街道沿いの地名だが、実は、この四つは道順に並んでいない。実際は武生↓「湯尾峠」↓「二ツ屋」↓「木の目山」↓「榛原」(葉原)↓敦賀の順で、これが本文では、③、②、①、④の順になってしまっているわけである。

可能性がないわけではないが、特別の理由でもないかぎり行きつ戻りつすることはないから(そういうことを示唆する記述はみあたらない)、この部分になんらかの錯簡を想像すべきだろう。③「木の目山」と④「榛原」の間に、①「湯尾峠」と②「二ツ屋」とが逆になって挿入されてしまった、と想像するのが最も自然だろうが、この史料編纂所本の体裁からみて、この写本がつくられた時に錯簡が生じたとは考えにくい。

国華本を参照してみると、「是ヨリ紙一枚半磨滅シテ更ニ判読スル能ハズ」「一・36下」に続く③「木の目山」と②「二ツ屋」の部分がまったくなく、その次にくる①「湯尾峠」の箇所も「越前国湯尾峠のひがしの茶屋の孫杓子なりと云々」「一・36下」の最後の一文を残し、その前の部分が欠けている。つまり、「是ヨリ紙一枚半磨滅シテ更ニ判読スル能ハズ」の後に、いきなり「越前国湯尾峠のひがしの茶屋……」が続いている。

原本では、この「越前国湯尾峠のひがしの茶屋……」一文の前に①「湯尾峠」の前半部分があり、この後に②「二ッ屋」と③「木の目山」の部分があったはずだから、国華本の前の段階で既に、この敦賀到着まで（正確には「榛原」の直前まで）の記述部分に混乱が生じていたのだろう。つまり、原本↓国華本と仮定すると、「越前国湯尾峠のひがしの茶屋……」の一文だけがなぜか残り、これを挟む前後の部分に欠落したと考えなくてはならないが、それよりも、史料編纂所本と同じ配列になっていた底本があり、そのうちの「是ヨリ紙一枚半磨滅シテ更ニ判読スル能ハズ」と「越前国湯尾峠のひがしの茶屋……」とに挟まれた部分が、国華本の底本がつくられる段階で既に欠落していた、と考えたほうが合理的に解釈できる。こう考えると、錯簡は写本が書きつがれる初期の段階で生じていたことになる。

それでは、「磨滅シテ更ニ判読スル能ハズ」という「紙一枚半」には何が書かれていたのだろうか。

敦賀に到着するまでに四つの地名がみられることは先に述べたが、その初めに登場する「木の目山」〔一・36下〕の直前に地名らしき言葉がみつかる。「里過て水のながれもあそうつの」の箇所「あそうつ」である。註2に触れたように、これは、福井市と鯖江市の間にある浅水（麻生津）という地名を掛詞におこんだものかもしれない。(3)では地名のおこみが頻繁におこなわれるから、その可能性はかなり高いだろう。とすれば、福井↓鯖江↓武生↓敦賀とつらなる街道の、福井と鯖江の中間地点にある浅水の直後に、武生と敦賀の間に位置する「木の目山」がくるのはいかにも不自然であるし、先に述べたように武生に一番近いのは「湯尾峠」だから、この部分にも欠落と錯簡のあったことが想像できる。

街道沿いに地名を辿ると、浅水から鯖江、武生を通って湯尾峠に至る道はかなりの距離がある。それにもかかわらず、「里過て水のながれもあそうつの」と「木の目山」との間には、判読不可を示す「クク」の記号が挟まっているだけで、段落すら設けられていない。少なくとも「磨滅シテ更ニ判読スル能ハズ」と注記した人物は、この大きな欠落部分に気付かなかったはずで、だとすれば、この部分の混乱はかなり早くから生じていたことになる。そして、磨滅した「紙一枚半」の部分には、福井から、こと鯖江の間の浅水あたりまでの記述があったはずである。

敦賀以降については、気比に住む「別れて知る人」を訪ね、さらに敦賀の西にある楠川近い西福寺に詣でたあと〔二・34上〕、敦賀から「荒路山」、「やたの」を経、海岸に出て琵琶湖を臨み、湖の西岸に沿って京に至る。京都出立後は、瀬田に至るまでが(2)の部分である。

(3)と(2)の間には、「是ヨリ関迄ノ紀行ハ無之」の注記がある。ここには、おそらく草津を通して鈴鹿峠を越え、現在の三里県鈴鹿郡関町に至る道々のように書かれていたのだろう。関以下は、駿河の三島に至るまで東海道に沿った地名がならんでいる。三島以降は「以下不明」である。

つけ加えると、この「以下不明」まで、ここで注目した四つの注記は、史料編纂所本の底本に既に記されていたものと思われない。(1)の冒頭の「書始メ途中ノ様ナリ」には、「コトハリカキ」という旁註があり、しかもこれに「コトハリ書ハ栄知氏ナルベシ」という頭註が加えられているから、この「書始メ途中ノ様ナリ」という注記は史料編纂所本を書写した人物のものではない。おそらく他の三つも筆者のものではないだろう。それは、この四つの注記が国華本にもそっくり書かれていることから裏付けられる（ただし、「コトハリカキ」と「コトハリ書ハ栄知氏ナルベシ」の注記は国華本にない）。

最後に、史料編纂所本と国華本の相違のなかでも、とくに重要な点に触れておきたい。それは、前者の行間にとどころ「多」とだけ書かれた箇所がみられることである。「多」は、(1)に一箇所〔一・36〕、(2)に四箇所〔一・36下、二・34上下〕にみられるが、(3)にはみられず、前半部にかたよっている。想像を逞しくすれば、この「多」とは「絵」なのではないか。つまり、原本ではこの「多」の位置に、実際に絵が描かれていたのだが、文字よりも写しとりにくい絵の部分が、写本のつくり継がれていくある段階で「多」という文字に置き換えられてしまったのではないか。本来が画家である又兵衛であってみれば、いかにもありそうなことである。道中のようすや人物などがスケッチ風に描かれていたものか、あるいは名所絵風に描かれていたものかは判らない。京都四条河原の記述の始まる箇所に「多」〔二・34下〕とあるのは、寛永期に描かれた「四条河原図」などの風俗画を一方で想起すると興味がつきない。『廻国道の記』の原本の再発見が鶴首される所以である。